
魔王様の大冒険

東雲なぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様の大冒険

【Nコード】

N6218Y

【作者名】

東雲なぎ

【あらすじ】

大魔王サタン。人々から恐れられる存在。

——のはずだったが、いつまで経っても勇者は城へと乗り込んでほこなかつた。

暇を持て余したサタン。中間管理職のルシファーも全然構ってほくれず、ついにはしびれを切らしてしまった。

そんなサタンの取った行動は……？

プロローグ

「なあなあ、中ボスなルシファー君……俺さあ、気付いたんだけどさあ……超暇だわ」

世間一般的には「大魔王」と呼ばれている俺は、クルクルと動物の生き血が入ったグラスを回しながら、魔王城の一室でゴージャスな玉座に座っていた。

胸にかかるくらいの長さをした美しい銀髪。紅いマントに、動物の骨を細工した装飾品。大きな漆黒の翼に2本の角。“いかにも”魔王という装いである。いや、実際魔王なんだけどな。

そんな俺の仕事は城に乗り込んできた愚かな勇者共を一掃すること……だったのだが。

「勇者、全然こねーじゃん」

サタンは生き血を一気に飲み干し、タンツ！とテーブルに八つ当たりするかのようにはグラスを置く。

「魔王の城にすら辿り着けないとか……つまらないと思わないかね、中ボスなルシファー君」

「その呼び方やめてください」

中間管理職兼中ボスのルシファーは、蒼いマントを翻し不機嫌そうに部屋を出ていってしまった。

「つれないなー」

はあ、と溜め息をつく……俺は人間界を監視するモニターを覗

き込んだ。

「どいつもこいつも弱っちいな……最初のボスでさえ突破出来てる奴少ないじゃねえかよ。俺いつになったら勇者と戦えんの？」

苛々しつつ、各地の勇者の様子を観察していると、俺の目に留まった一人の勇者がいた。

「……こいつ、可愛いな」

シルビア「ライトネス。Level 8。職業「かけだし勇者」
さらさらな赤い長髪、長い睫毛に大きな瞳。ジャケットの下に胸元の開いた黒のドレスを纏っている。胸は小さめだが、なかなか良い形をしていた。

「俺、どうせならこういう可愛い子と戦いてえな、んで、どさくさに紛れて乳揉んだり尻触ったりあわよくばアレをこうしてソレをああして……」

「サタン様」

「……あ？」

俺の桃色な妄想はルシファアの言葉によって遮られた。憤慨した俺はプルプル震えながらルシファアを睨んだ。

「東イリアス地方の魔物が減ってきているようです。召喚してください」

「くそっ……俺は召喚術師じゃなくて大魔王だってんだよ」

この世界の設定上、魔物を増やすことが出来るのは所謂ラスボスの俺だけなのである。

「大体魔物を増やしたら余計勇者来てくれなくなるじゃん、いいよもう増やさなくて……」

「早く任務を遂行してください」

表情ひとつ変えずにルシファーはぴしゃりとそう言い放った。つくづくつまらない男である。

「まったく、しょうがねえなあ……」

俺は禍々しい髑髏の装飾をあしらった杖で魔方陣を描くと、ゴニョゴニョと呪文を唱えた。

「出でよ！ 我が下部達！」

右腕を振り上げると、魔物が魔方陣の中心からわらわらと沸きだす。

「……出たよ、魔物」

最初こそ決めポーズ決めて「今日の召喚は一段とかつこよく決まったぜ！」とか言ってた俺も最近はずっかり飽きてこの通りである。

「ありがとうございます。では、私は魔物を東イリアス地方に送り届けて参ります」

「へーい、気をつけてなー」

……本当につまらない毎日だ。

ラスボスって響きに憧れて頑張ってたこの地位に就いたのに勇者が来なきゃなんの意味もない。

転職しようかなあ……村人あたり……。

絶望の眼差しで見つめた先に映ったモニターの中で、シルビアの笑顔が光っている。

「……そうだ、いいこと思いついたぞ」

俺の濁った瞳はみるみるうちに輝きを取り戻し、悪戯っぽく微笑みながら人間界へと続く階段へと向かう。

「俺、魔王だってことは隠しつつシルビアの仲間になって、この城まで一緒に冒険してあげればいいじゃないか……！」

——……こうして、異色の大魔王の大冒険が始まったのである。

勿論、「中ボス」のルシファーなんかは粉碎できる力を持っていた。

「ま、いつか。うっさいのいなくなったし。あとで誰か回復呪文かけてくれるだろ」

俺はくるりと向きを変え、改めてルンルンと階段を降って行った。

——……人間界。緑で溢れていて妙に空気が澄んでいる場所。
俺達魔族にとっては心底居心地が悪い。

「シルビアちゃんは確か……エイビスの町の武器屋で剣を物色していたはずだったな」

俺の下半身の剣じゃだめかな？ とか桃色の妄想を膨らませて二ヤけつつ、俺はエイビスへと向かった。

エイビスは森のほずれにある小さな町だった。所謂、勇者たちの冒険がまだ序盤の頃に立ち寄る場所だ。

「おうおう、弱そうな奴等がたくさんいるぜ……ん？」

町人が俺を見てザワつき始めている。翼と角は隠しているものの、着ている洋服や禍々しい装備品の数々を見て異端と感じ取ったのだろう。

「おい……あいつ、なんかおかしなオーラ放ってないか……？」

「まさか、魔族？」

「いやだあ、薄気味悪い」

そんな声がちらほらと耳に入った。おいおい、町到着後二分で正体がバレかかっているぞ。

「ごちっ

その時、町の子供が俺に向かって石を投げつけた。

え？ 何こいつ死ぬの？ 俺は思わずギロリとその子供を睨んだ。

「こいつ、大魔王だ！！」

突如、石を投げた子供が叫んだ。

え？ あれ？ 身バレした。早々に。なんで？

「ま、魔王ですって……！」

「近寄らない方がいい」

「町から出ていけ！！」

町人達みんなして石を投げてきた。

でも、全然痛くない。石程度じゃダメージ受けないし。あ、でも怪しまれないように痛がるべきか？

「やめろ！」

俺と町人達の間割って入ってきた一人の女剣士。

「余所者だからってそんな扱いするのはやめろ！」

さらさらな赤い長髪、長い睫毛に大きな瞳。

「大丈夫か？」

胸は小ぶりだがなかなか良い形をしている。

俺の顔を覗き込むためにしゃがんだ瞬間、それはぷるりと揺れた。

「超大丈夫です!!」

俺は思わずその女剣士……改めシルビアの手の甲にキスをした。
まさかシルビアが助けてくれるとは思わなかった。これが運命つてヤツか……!

「うわあああ! 何すんだ変態!!!!!!」

思いつきり鳩尾をド突かれはしたものの、痛くない。むしろ気持ちいい。

「あ、ソレもつとやっていいです」

「うわあああああ! 何こいつケロツとしててキモい!!!!!!」

後ずさるシルビア。町人達も変なことに関わるまいとさつさとどこかに行ってしまった。

「さつきは助けてくれてありがとう。取りあえず俺と宿屋行かない?」

「い、行かない! 私はこの先のヘイオスの沼地の大蛇退治に向かわなければならんだ……変態に構っている暇はない!」

「ああ! あの大蛇ね! 俺も仲間に入れてよ、大蛇退治!」

「……は? 遊びではないのだぞ。素人が命を粗末にするな」

「えー。俺強いよ? 超強いからさ。ほんとほんと」
「断る」

シルビアは俺に背を向けると一人でさっさと町を出て行ってしまった。

……確か、大蛇はLevel 16のボスだったはずだ。Level 18のシルビアじゃ敵いつこない。
そこでだ。俺が救世主役をしよう。

大蛇VSシルビア↓シルビア苦戦↓俺助ける↓サタン様かつこい
い↓共に宿屋へ↓ゴールイン

——完璧じゃないか！

俺は紅いマントを勢いよく翻し、颯爽とシルビアの後を追ってヘイオスの沼地へと向かった。

第2話 仲間

「……何故付いてくる？」

バレた。尾行開始わずか三分で即効シルビアにバレた。シルビアは眉間にしわを寄せて怪訝そうにこちらの様子を見ている。

「いやあ、俺って可愛い子がいるとついつい追いかけてきちゃうんだよなあ、本能的にさあ」

「……」

シルビアは迷惑そうにしつしつとまるで動物かなんかを追い払うかのような仕草をした。何それ犬扱い？　そういうの嫌いじゃないぜ？

「……」

「……」

「……いい加減にしてくれないか？」

「え？　なにが？」

「お前、大蛇がどれだけ危険かわかっているのか？」

「勿論！　だって俺が呼んだんだし……」

「呼んだ、だと？」

「あ、いや……こつちの話し」

「お前……何者なんだ？」

シルビアは更に怪訝そうな顔になった。いけないいけない、口を滑らせないようにしなくちゃな。

「俺ねえ、魔法使いやってるんだわ。前まで凄腕の勇者に雇われて

ただけどさ、今は訳あって一人旅してる」

「魔法使い……だと？」

「あ、信じてない？　じゃあちよつとだけ魔法を見せてあげるよ」

俺が指をパチンと鳴らすと近くにあった森一帯が轟音と共にすべ
て吹き飛んだ。土埃が辺り一面に舞う。

シルビアは大きな瞳を更に大きくして、口をパクパクさせていた。

「どう？　俺強いだろ？」

「バカかお前は！？　森が吹っ飛んでしまったじゃないか！！」

シルビアは思わず俺の後頭部をグーでガツンと殴り付けた。なか
なか暴力的なお嬢ちゃんだ……良い拳してやがる。

——が、防御力的な問題で何もかもが気持ち良く感じてしまう。

ああ、もっとやってくれ。

「な！　お前さっきから痛みというものを感じているのか？」

「えっ？　あ、ああ、俺さあ、あ、アレ……アレなんだわ！　ドM
なんだわ！」

「や、やっぱり変態なのか……っ！！」

シルビアは汚物を見るような目でこっちを見ている。

俺、そういう目嫌いじゃねえわ。

……あれ？　さっきは咄嗟にドMとか言っちゃったが俺ってもし
かしてマジで……

「とにかく、私はお前と共に行動する気はない」

「そうなの？　俺はシルビアちゃんと行動する気満々なんだけどな

あゝ」

「……っ！ お前、何故私の名を知っている！？」

……俺は一体何度目の墓穴を掘っちまったんだろうか。
シルビアのサタンを見る目は疑いから怯えへと変わっていた。

……うーむ、流石の魔王様でももう言い訳が出てこねえぞ。

「お前、何かを隠しているな？」

「おいおい、DMってことまで暴露させておいてまだ俺のこと疑って……」

「まさかとは思いが、さっきの子供が言った通りお前本当は魔王なのではないだろうな？」

おい。

人間界で大人気のアニメ「名探偵コナソ」でもまだ主人公の招待バレてねえっつーのに、いくらなんでもこの展開俺の正体バレんの早過ぎだろう？

じわりと額に冷や汗が滲みだした。

「……ふっ、まさかな。こんな変態が私達勇者の宿敵はずがない」

シルビアは自嘲しつつ、そう言った。

——セーフだ。

自己解決してくれたぞ。俺、変態でよかった。

「じゃあな。もう会うこともなかつ……付いてくるなよ？」

シルビアはギロリと俺を睨み付け、くると方向を変えて足早に

林の中へと消えた。

つれないなあ。ルシファーみたいにつれないぜ。

俺は仕方なくシルビアとは別行動でヘイオスの沼地へと向かった。

沼地ではヘドロの魔物や小さな虫やヘビの魔物で溢れていた。そういったものの亡骸がそこかしこに転がっている。きっとシルビアが戦闘した痕跡だろう。剣の腕はLevel 8にしてはなかなかのようだ。

「確か、これでさえ木を潜った辺りにボス配置したはずだったな……」

——その時、けたたましい轟音が沼地の淀んだ空気を激しく振動させた。きっと大蛇が移動するときの音だろう。それほどまでにヤツはでかいのだ。

「もう始まつてるのか。シルビアちゃんは無事かな？」

大蛇“キングスネーク”は、シルビアを胴体でぐるぐる巻きにして、グイグイと締め上げている最中だった。チロチロとした舌先が今にも鼻先に触れそうになっている。

シルビアは抵抗しようと手に持った剣を振りかざすものの、抵抗も虚しく剣は手の平から地面へとするりと抜け落ちてしまった。予想通り苦戦中つてところか。

「……ぐうっ！」

それでも抵抗しようと、足をばたつかせる。

もう少しアングルさえ良ければスカートの隙間からパンツが見えそうだ……！

俺はごくりと生唾を飲み込んだ。そして、大蛇にこっそりとアイ

コンタクトを送る。大蛇はコクリと頷くと、シルビアの足に巻き付き、逆さ釣りにしてみせた。

「水玉！」

「ちよ、へ、変態！ 見てないで助けるっ」

「OK、OK。ただし、条件がある」

「な、なんだ？」

「俺をパーティーに加えてくれ」

「く……っ！ 仕方ない……加えてやるから手を貸してくれ！」

「よшきた！！ 超貸す！！！！ どっせえええい！！！！」

両手を振り上げると沼地一帯に閃光が走り、物凄い爆発音が響き渡った。辺り一面に煙りや埃が舞い上がり、たんぱく質の焼け焦げる独特の嫌な臭いが漂う。

「な……こ、今度は沼地ごと吹き飛んだぞ！？ お前、一体どんな魔法使ったんだ！？」

「言っただじゃん。俺強いよって」

俺は髪をかき上げ、ふふんと自慢げに笑って見せた。

そして、シルビアはそんな俺の尻を思いつき蹴り上げる。

「無駄なものまで破壊するなんて言っているんだ！！ 罪のない動物達まで巻き込んで……！」

シルビアは涙ぐみながら力説する。少々乱暴者のようだが、心は優しいようだ。これでこそ俺の嫁になる女である……！

「すまない、君を守ろうと思ったら……つい、加減というものを忘れてしまった……」

「御託はいい。気色悪いやめろ」

シルビアは顔色ひとつ変えずにぴしゃりと言いつつ放った。

「次また無駄に破壊行為を行ったらお前をパーティから即はずすからな」

「ってことは、俺を仲間って認めてくれたんだね……！？では、さっそくよろしくねのキスを……」

ぐしゃああっ！

シルビアは思いつ切り俺の顔を殴った。しかも、グーでだ。痛みは感じないものの変な音がした。

この子……多分剣より拳の方がいい線いってる。

「さっさと次のダンジョン目指すぞ、変態」

——……こうして、かけだし勇者と変態魔王の奇妙な二人旅が始まったのであった。

第3話 双頭獣

「ねえねえ、まだ戦うの？」

俺は木陰に座り込み、頬杖を付きながらフィールドの魔物と必死に戦うシルビアを眺めていた。避けて通ればいいものを……シルビアは片っ端から雑魚敵に勝負を挑んでいる。

「しょうがないだろう、Level上げをしつかりやっておかないと強敵に敵わないから……お前もそんな所に座ってないで戦え！」
「はいはい」

俺はすつと立ち上がりその辺徘徊していたオオカミのような獣系の魔物に向かって拳を振り上げた。その瞬間魔物は踵を返し、全速力で逃げ出して行った。

「んだよ、なつさけないな」

「……お前、一体Levelいくつなんだ？」

「それはねえ………ヒ・ミ・ツ」

ウインク飛ばして語尾にハート付けるような話し方したのが気に障ったのか、シルビアはこつちを思いつ切り睨んだ。……でも、言えねえよ。Level100とか言えねえよ。

その時、ヒュン！ と風を切る音が聞こえた。次の瞬間、キャツとシルビアの短い悲鳴が響き、頬に切り傷が一直線に出来た。

——カマイタチか！？

辺りを見渡すと鳥系の魔物が上空からこつちの様子を窺っていた。

「大丈夫か？」

「あ、ああ……私としたことが油断してしまった」

シルビアは頬から出た血液を手の甲で拭い、剣を鞘から抜き、スツと腰を落として構える。

ウィンドブレード

“ 風 刃 ”

勢いよく剣先が上空に向かい弧を描き、風の刃が魔物に向かって飛んでいく。それは見事に命中し、魔物は地面へと落ちてきた。

その瞬間、シルビアは淡い光の柱に包まれる。どうやらLevel 1が9に上がったようだ。

「おめでとぅー！」

拍手しながらそう言うと、シルビアは照れているのか、目を伏せながら小さな声で「ありがとう」と呟いた。

「さて、そろそろ休憩といかないかな？ シルビアちゃんも疲れただろう」

「そうだな……最寄りのコルデスの街で少し休もう」

「……と、その前に」

俺はシルビアの頬に向かい手を伸ばす。白く柔らかい光が放たれ、頬にできた切り傷はスーッと消えてしまった。所謂“回復呪文”つてやつだ。

「可愛い顔に傷が残らないように、な」

「あ……す、すまない」

シルビアは再び目を伏せ、傷が消えたことを確認するかのよう

頬を手で擦っていた。

——それから1時間ほど歩き、ようやくコルデスの街へと辿り着いた。

そこは、そこかしこに花が咲いていて、甘い香りで溢れていた。エイビスよりも栄えているようで、武器屋に防具屋、よろず屋にアクセサリーショップにカフェ……色々な店が並んでいる。民の数も多く、活気に満ちていた。

「噂には聞いていたが、綺麗な街だな」

シルビアはきよろきよろと辺りを見渡し、目を丸くしている。

「私、武器屋で剣を見てくる」

「え、あ……ちょっとシルビアちゃ……」

話が終らないうちにシルビアはさっさと人混みの中へと消えてしまった。迷子にならなければいいが……。

しかし、年頃の女子が真っ先に武器屋とは……でも、それがシルビアちゃんらしいのかな。

「さーて、俺はどうしようかな」

大きく伸びをして辺りを見渡す。近くに咲いていた大きな紫色の花から漂う芳香が俺の鼻孔を刺激する。花の香りはどうも苦手だ……。とりあえず、建物の中に避難しよう。

俺は近くにあった建物の中に入った。

ドアを開けると、むわっと酒の匂いがして、男達の妙にでかい笑い声がこだまする。特に確認せずに入ってきてしまったが、ここは

どうやら酒場だったようだ。俺はとりあえず部屋の隅に置かれている酒樽の上に腰を下ろした。傍のテーブルに座って飲んでいる声の大きな男2人組の会話がいやがおうにも耳に入る。

「アイオーンが魔物に殺られちゃったそうぞ」

「なんだって？ あの凄腕の剣士が？」

「ああ、何やら双頭獣がこの辺に出没しているらしいんだ」

「そりゃあ、恐ろしいことだな。いつ死んでもいいように今のうちに酒をたらふく飲んでおかねえと」

「がっはっはっは！ それくらいしか俺達には楽しみなんでないしなあ！」

——双頭獣？

サタンは耳を疑った。そんなもの召喚した覚えがなかったからだ。

“誰か俺以外に魔物を召喚できるヤツがいる”

そんな考えがパツと脳裏を過る。変な胸騒ぎを感じて酒場を出ようとした瞬間、ちょうどドアから入ってきた男にトンとぶつかってしまった。

「おっと、すまな……」

「貴様！ どこ見て歩いてる！？」

「——へっ？」

俺は身長2メートルはあろう大男に胸倉を掴まれてそのまま床に叩き付けられた。

え？ いったい何事？

痛みはなかったものの、あまりにも突然のことすぎてその場からしばらく動けず、目を頻りに瞬きさせた。

「アイツ、確かアイオーンとよくつるんだ……」

「アイオーンが死んで苛々してんだろ。おー、恐い恐い。目え合わせるんじゃないぞ」

さっきまで賑わっていた酒場が一瞬にして静まり返る。

大男はウオツカを注文し、空いていた席にどしりと腰を下ろした。筋肉質の体にボロボロの黒いマントを纏い、手入れされていないであろう長い黒髪をかきあげ、苛々とした表情で目を伏せている。

背中にバカでかい大剣を装備しているところから、きつと剣士だろう。

その時、大男が「何見てやがる」と言わんばかりにこつちを睨んだ。

俺は面倒な事に巻き込まれるのが嫌だったので、速攻で目を逸らし、そそくさと酒場を後にした。

第4話 雨

「さて、そろそろシルビアちゃんと合流するか……」

さっきまでの晴天が嘘だったかのように空はどんよりとしていて空気が重苦しい。そろそろ陽が落ちる時間帯ということもあり、辺りは闇に飲み込まれつつあった。

その時、ポツッと頬に滴が落ちる。とうとう雨が降り出してしまった。

俺は足早に武器屋へと向かった。

店内へと続くドアを開けると、シルビアが熱心に剣を見比べている姿が視界に入った。

「それ、欲しいの？」

「わわわわわ……！？」

急に声を掛けられたシルビアは驚いてしまい、手に持っていた剣を落としそうになる。間一髪のところでなんとか剣を受け止めて、ホッとした表情を見せるや否や、ガツリと俺の後頭部を殴った。

「脅かすな……バカ……！」

ざわざわとしていた店内だったが、シルビアの怒声に驚き静まり返り、客が一斉にシルビアに注目した。シルビアは恥ずかしそうに俯くと、小声でこう言った。

「何の用だ？」

「その剣欲しいのかなーって……買ってあげようか？」

「な……そうやって優しくしておいて後々変態な事を要求するんじゃないだろうな？」

「そんなのあたりまえじゃないか」

ゴツと鼻筋を殴られた。普通の人間だったら鼻血吹いて倒れてもおかしくない威力だ。

「うそうそ……いや、そうしたいのはほんとなんだけどさ。買っただけよ」

「い、いいのか？」

シルビアの瞳が期待の眼差しで大きく見開かれる。まだLevel 110にも満たないかけだし勇者じゃ、そんなに金も持っていないのだろう。エイビスで剣を物色していた時も「欲しい剣はあるが手が届きそうもない」という表情をしていたのを俺は見逃しはしなかった。

剣の会計を済まし、シルビアに手渡す。いつものムスツとした表情からは想像も出来ないような笑みが零れた。

「ありがとう！……そういえば、私はまだお前の名前を知らない。何と言うのだ？」

「サタン、だ」

「『サタン』か……魔王みたいな名前だな」

「そうだね。魔王みたいな名前だね」

一瞬冷や汗が額に滲んだが、さらりと流してみた。この展開にも概ね慣れた。

「改めてありがとう、サタン」

嬉しそうなシルビア。初めて見る少女のような彼女を見て、俺は満足そうに微笑んだ。

店を出ると外は大荒れだった。雨が降りしきり、雷の轟音が空気を揺るがす。

二人は宿屋へと泊まることになった。

「ようこそいらっしゃいました。お二人様ですね。どうぞ、こちらへ……」

フロントのフードを被った物腰が柔らかそうな白髪のお婆さんに部屋まで案内される。廊下は少し暗く、所々に置かれたランプの光が辺りをぼんやりと照らしている。

「お部屋はこちらになります。どうぞ、ごゆっくり」

女性はというと、何故か意味あり気に微笑み、フロントへと戻って行った。

案内された部屋はごんまりとしていて、ベッドはひとつしかなかった。小さなクローゼットに小さなテーブル、ダークブラウンの小さなソファ。ベッドの向かいにある棚の上には古そうなテレビのモニターが置かれている。

テーブルの上にあるランタンの炎がゆらゆらと部屋の中をオレンジ色に染めていた。

「……」

「……シルビアちゃん、そんなに警戒しなくても」

シルビアはクローゼットの脇にちょこんと腰を下ろし、俺と一定の距離を保とうとしていた。

「雨で濡れただろう？ お風呂に入っておいでよ」

「……どうせ覗くんだろう？」

「じゃあ、一緒に入る？」

「入らない！」

「冗談だよ冗談。風邪引いちゃうから入っておいでよ」

「……絶対絶対、覗かないと約束できるか？」

眉をひそめ、困ったかのような表情でシルビアは俺を見つめた。思わず意地悪をしたくなったが、グツと堪えて「約束する」と頷いた。

シルビアは隣接している脱衣所のドアを開けたところで、再度俺の様子を窺い「覗くなよ！」と言いつつ、少々強めにドアを閉めた。耳を澄ますとガサゴソとシルビアが脱衣する音が聞こえる。思わず口元がニヤけたが、悪戯心を鎮めるためにテレビのモニターのスイッチを入れた。

画面に映し出されたのは見たこともない魔物の映像。ブラウン管の中で二つの首を持った狼のような魔物が森で暴れていた。少し離れたところでリポーターが何かを話している。

“双頭獣”

この世界の魔物は全て俺が召喚しているはずであった。——なに、見たこともない魔物が現れている。これは、一体どういうことなのか……。

ゾワゾワと胸騒ぎを感じる。俺は思わずモニターのスイッチを切った。

静まり返った部屋に雨音が響き渡る。

カーテンをそっと開き、窓の外を眺めた。豪雨のせいで辺りには霧が立ち込めていた。

「雨も久々だな……魔界では気象なんてものないからな」

その時、フツとまだ人間だった頃の記憶がフラッシュバックしたような気がした。俺は手の平を額に当て、苦痛に歪んだ表情を浮かべた。

（……久々の人間界にちょっと疲れたか？）

俺は自嘲するような薄笑いを浮かべ、ソファアーの上で横になった。

第5話 襲撃

のしっ。

俺は身体の上に何か重みを感じて「うう……」と唸りながら目を覚ました。

辺りはまだ闇に包まれていることから夜中だろう。暗すぎて自分の上に乗っているのが何者なのかもよくわからない。

暫くして暗闇に慣れてきた瞳は、とんでもない光景を目にする。

「シ、シシ……シルビアちゃん!？」

俺の胸の上にちょこんとシルビアが乗っていた。口をポカンと開けてぐっすりと眠っているようだ……。普段着ている上着は身に付けておらず、黒のドレスからは今にも胸がはだけそうになっている。——これは夢か？

自分の顔を思いつ切り殴ってみる。痛い。流石俺の攻撃力だ。久々にダメージを受けた。

って、感心してる場合じゃねえ……！

ごくりと喉が波打った。

そろりそろりとシルビアの胸へと手を伸ばす。

「んう……」

シルビアが小さく呻き、びっくりして手を離す。

「ううーん……」

——がばっ。

突如、寝返りをうつたかと思いきや、シルビアに頭を抱きかかえられた。胸に顔が圧迫される。ソレ特有の柔らかい感触は、俺の理性の鎖を外すのは容易かった。

俺はシルビアを抱きしめ、自分の唇とシルビアの唇を重ね合わせようとした。

「……ん？」

ぱちりとそこでシルビアの瞳は開いた。

一頻り間を置いて、シルビアはニコツと微笑み俺の頬を引つ叩いた。

「何しようとしていた変態!？」

「え、や、だって、誘ってきたのはシルビアちゃんじゃ……!」

シルビアが再び手を振り上げる。

「何を言っている？ そんな訳ないだろう!」

シルビアの腕がしなり、俺の頬に衝撃が走る。

一つわかったことは、シルビアの寝相はとんでもないって事だけだった。

「……ん？」

「……どうした、サタン？」

さっきまでふざけていた俺がいきなり顔をしかめたことに気付き、思わずシルビアが身構える。

「足音だ……それに、殺気を感じる」
「何だと？」

耳を澄まし、神経をとがらせる。

「……魔族、か？」

それは、確かに同族が発する気だった。俺は眉をひそめる。
魔族は魔王……つまりは、俺の命令無しには動かないはずだ。しかも、殺気立ちながら俺を襲おうとするなんて言語道断だった。

やっぱり、何かがおかしい。

「サ、サタン……くるぞ！」

けたたましい音とともに派手にドアが壊された。
中になだれ込んできたのは、なんとフロントにいた白髪の老婆だった。手には大きな鎌のようなものが握られている。

「な、この人……！？」

魔族の正体を見るや否や、シルビアは怯んでしまった。すかさず魔族は鎌を振るう。

「させるか！」

直撃寸前というところで、鎌を素手で受け止めた。

「見た目に反して、ずいぶんと俊敏だなあ、婆さんよ！」

鎌を掴んだまま、そのまま魔族ごと薙ぎ払う。そして、バランスを崩した隙を狙って傍にあった椅子を思いっ切り投げ付けた。

「ぐあああつ!!」

「……俺を誰だと思ってやがる」

痛みで悶え苦しむ魔族を俺は右足で踏み付け、睨みつけた。

「誰の命令だ？ 誰が魔界で動いてやがる？」

その瞬間、魔族の身体から赤い光が放たれ、耳をつんざくような爆発音が響く。

俺は咄嗟にシルビアを抱きかかえて地に伏せた。魔族はどうやら魔法も使えるようだ。

「くっ……シルビアちゃん、大丈夫か？」

「あ、ああ……なんとか」

「あいつ……ちよつとおいたが過ぎるな」

パラパラと落ちてくる天井の破片を払いのけ、俺は右手を掲げた。

“ヘルフレア 地獄の業火”

「ぐああああああつ!!!!」

突如、魔族の足元から野太い火柱が発生した。炎を浴びせられて魔族は苦悶の声を発する。

やがて、魔族の姿はゆっくりと滅び崩れ、灰のようになってさーっと消えていった。

「勝った……のか？」

シルビアがよろよろと腰を下ろす。魔族との戦闘は初めてだったのだろう。額を流れる汗がその恐怖を物語っている。

「もう大丈夫だよ。いきなりの戦闘で疲れただろう？ 俺がまた変なのこないように見張ってるから、少し休みなよ……って」

シルビアは既に床の上で寝息を立てていた。相当疲れていたのか、元から寝付きが相当いいのか……。

俺は彼女をそっとベッドの上まで運び、毛布を掛けた。

外からガヤガヤと声が聞こえる。これだけ大騒ぎしていたんだ……

……きつと民達も魔族騒動に気が付いたのだろう。面倒なことにならないように、早朝にはこの街を出るか。双頭獣についても真相を確かめないといけないしな……。

俺はソファアーに深く腰掛け、ぼんやりとランタンの炎を眺めながら朝日が昇るのを待った。

第6話 無骨な剣士

早朝、俺達はコルデスの街を後にした。そして、双頭獣が暴れているラウルの森を目指す。

隣ではまだ眠たそうなシルビアがとぼとぼと元氣なく歩いていた。今なら尻を触っても気付かれないんじゃないかってくらい脱力している。どうやら、朝に弱いようだ。

「大丈夫？ シルビアちゃん」

「……ああ……大丈夫だ……多分……」

その時、シルビアがつま先付近にあった大きな岩につまづき、ズザーッと盛大に転んだ。全然大丈夫じゃないこの子……！

俺はすぐさま彼女を助け起こした。

「シ、シルビアちゃん？」

驚いたことにシルビアはそのまま寝ていた。おいおい、冗談だろ。夜中の寝相といい、寝起きの悪さといい……つまりこれは、悪戯し放題ってことだな！

「取り込み中、すまない」

都合の良いように解釈し、まさにシルビアに悪戯しようとしたところで誰かに声を掛けられた。

……んだよ、これからって時に。不機嫌そうな眼差しで声の主に視線を向ける。

「あんたは……！」

声の主は、昨日酒場で俺を叩きつけた長髪マントな大男だった。

「昨日はすまなかった」

大男は深々と俺に向かって頭を下げた。昨日の無骨な態度とのあまりの差にどうすればいいかわからず、俺は言葉が出なかった。

「街で魔族を倒したと聞いた。貴殿はなかなか腕が立つようだな」
「ま、まあな。魔法の腕にはちよいと自信はあるが……」

——ガシッ。

「……へっ？」

突然大男に両手を握られる。ちょ、ちょっと待て。俺にはそんな趣味は……！

「なんと！ 魔法を使えると言うのか！ 貴殿にどうしても頼みたいことがあるのだが」

「だああっ！ わかった……わかったからその手を離せえいっ！！」

俺は大男の手を振りほどき、数歩下がって距離を置いた。

「双頭獣を倒すのを助太刀して欲しいのだ」

「双頭獣だって？ それなら好都合だ」

俺が頷くを見て、大男は歓喜の表情を浮かべ両手を広げる。おい、抱き付かれるのは勘弁だぞ……俺は更に数歩下がる。

「んう……やかましいぞ、サタン……ん？」

その時、シルビアが目を覚ました。

彼女は目の前にいる大男の存在に気が付くと、身体を硬直させて瞳を見開いた。

「だ、誰だ……この大きいのは？」

「失礼した。申し遅れてしまったが、わたしはカイク。カイク＝オランダだ。昔は傭兵をしていたが、今はただの剣士をしている」

「俺は一流魔法使いのサタンだ。で、こっちの赤髪の美しい女性が勇者のシルビアちゃん」

シルビアは状況を上手く飲み込めないのか、キョロキョロと俺とカイクの顔を交互に見ている。

「サタン殿、シルビア殿。短い間だが、世話になる」

カイクはまた深々と頭を下げた。シルビアはよくわかっていないような表情を浮かべていたが、それに合わせてぺこりとお辞儀をする。

「双頭獣は強敵だ。わたしの戦友も……アイツに殺されてしまった」

カイクの瞳に一瞬悲しみの色が滲んだが、すぐにそれは掻き消され、力強くこう言った。

「このままではいずれ、街にまであいつは足を延ばすことだろう。その前に何が何でも討伐しなくてはならない」

彼は何かを決意したかのように前を向き、まっすぐと森へと向か

って歩きだした。俺とシルビアもその大きな背中を追い、森へと向かった。

——俺達がラウルの森に着いた頃には、既に陽が落ち掛けていて、空は橙と青紫のグラデーションに染められていた。

「夜の森は危険だ。二人共気を付けるんだぞ」

カイムの呼び掛けに俺は「ああ」と頷き、シルビアはいつでも剣が抜けるように右手で剣の柄を握った。

森特有の湿気を含んだ重苦しい空気が肌に纏わり付く。時折遠くで「オオオオオ——……」と狼の遠吠えのようなものが風に乗って聞こえ、その度にびくびくとシルビアが姿勢を低くする。口数も少ないようだし、随分とビビっているようだ。

「大丈夫だよ。いざとなったら俺が守ってあげるから、さ」

そう言って、どさくさに紛れてシルビアの尻へと手を伸ばす。

「どこを触っている!?!」

「ごきつ——!!」

シルビアの鉄拳が素早く繰り出され、鈍い音が俺の鳩尾から響く。……うん。やっぱりシルビアはこうでないと。

「ほう。シルビア殿はなかなかいい拳をしているな」
「そうか? サタンのお陰でだいぶ鍛えられた」

「なるほど。サタン殿がシルビア殿を鍛え上げたのですな……！」

尊敬の眼差しで見つめられるのは悪い気はしないが……違つぞ、カイル。

彼女は俺をサンドバッグに使って自ら鍛え上げたんだ……。

——…あれから一体どのくらいの時間歩いたのだろうか。

俺とカイルはまだしも、シルビアの歩くペースが大分落ちてきていた。疲れからか、地を何匹もの蛇が這っているかのように張り巡らされた木の根に彼女は、幾度となく足を取られてはつまずいて転んでいた。

「今日はもう休みましょう」

それを見兼ねて、声を掛けたのはカイルだった。

「……す、すまない……足を引つ張ってしまつて」

息を切らしながらシルビアが申し訳なさそうに俯いた。しょんぼりとしている彼女にすかさず俺は優しい言葉を掛けようとしたが……

「そんなことはありません。わたしもそろそろ休憩しようと思つていたところですよ。体力を温存しておかないといざ双頭獣と戦闘になつても不利になりますからね」

俺とシルビアの間に割り込んできたカイルの無駄にでかい背中のお陰でそれは不可能となつた。

出番を奪われた俺は思わずギリっと下唇を噛みしめる。

そんなことは露知らず、カームは濃紺の腰下げ袋からマッチを取り出した。

そして、段取りよく枯れ枝や枯れ葉を集め火を付ける。無骨な見た目に反して用意周到な男らしい。

「わたしが見張っておこう。サタン殿とシルビア殿は体を休めてください」

「ああ、すまないな」

「……スー」

カームが見張りを申し出てくれたので俺はそれに甘えることにした。昨日から殆ど寝ていなかったので、流石に疲労感がある。

……言うまでもないが、シルビアは既に横になり眠っていた。

煌々と燃え上がる焚火の紅蓮色をぼんやりと瞳に映しつつ考え事をしているうちに、俺の意識は深い闇の中へと堕ちて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6218y/>

魔王様の大冒険

2011年11月24日12時46分発行